SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

居心地のよい学級づくりをめざして：特別な支援を必要とする児童と集団とのつながりを育む支援のあり方を探る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮崎, 崇 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007728

居心地のよい学級づくりをめざして

－特別な支援を必要とする児童と集団とのつながりを育む支援のあり方を探る－

宮崎　崇

Making Elementary School Classes More Comfortable:
How to Form Suitable Relationships between Children with Special Educational Needs and their Classmates

Takashi MIYAZAKI

1. 問題の所在と本研究の課題

平成24年12月に文部科学省から発表された通常の学級で特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は約6.5パーセントであった。特別支援学級の設置数や在籍児童数も、この20年間で約2倍に増加している。児童の様々な特性に対する個別支援が実施されることで、学級全体の指導方針の一貫性が子どもの側から分かりにくくダブルスタンダードと受け止められる場面も少なくない。さらに毎年学級担任が変わることも多く、支援の引き継ぎが十分になされていない場面も多い。学年が変わる、担任が変わる、校種が変わるなどの大きな変動条件の中にあっても、特別支援対象児と周囲にいる集団それぞれへの支援を継続して行うことで、より深い他者理解の足掛かりを作ることができ、子どもたち同士が自然な形で互いを理解し支え合う学級が、特別支援対象児にとって何よりも安心感をもたらす源泉となり、継続性のある、安定した支援を実質化する重要な資源となるであろう。

そこで本研究では、学年に特別支援対象児が在籍し、生徒指導上の困難を多く抱えるA市立B小学校6年2組の児童を対象として、2つの研究を進める。

【研究１】	【研究２】
学級の雰囲気と特別な支援を必要とする児童への支援の手がかりをつかむために、学級の「居心地のよさ」測定尺度の開発と、対象学年や学級の「居心地のよさ」の構成要素を探り、特徴や傾向をつかむ。	質問紙調査の結果と観察の結果より支援計画を策定し、その情報を担任に提供するとともに、具体的な支援策を学年部へ提案し、児童の変化を観察していく中で、より効果の高い支援のあり方について探る。

2. 研究の流れ

（1）研究を進める上での仮説

自分自身に対する信頼感を持っていること、さらに、周囲の他者との関係が良好であることの二つが両立することが「居心地のよい学級」を作り出すのではないかと予想した。第1の構成要素である自己に対する信頼感は、「自分に対する自信」と「教室の学習がうまく進んでいて不安を感じていない状態」の両側面から成り立つと仮定した。また、第2の構成要素である自己と他者関係が良好であるためには、「被受容感」「友だち信頼感」「友だち肯定感」「被侵害の低さ」及び「教師に対する安心感」「教師不信感の低さ」「教師役割遂行に対する

評価」から構成されると仮定した。これらの構成要素がよい方向へ改善していけば、児童の安心・安全感が高まり、「居心地のよい学級」を作り上げていくと考えた。

（2）検証方法

上記を検証していく方法として質問紙調査を行い、学級集団としての変化を読み取ることとする。また、抽出児童として ADHD 傾向を持ち特別支援対象児となっている B 子さんを選び、継続観察及び個別支援を続け、個と集団への支援による変化や周囲との人間関係の変化を 3 回の質問紙調査を実施、分析していく中で読み取っていく。

3. 居心地のよさ測定尺度の開発

（1）質問項目の作成

居心地のよさを構成する要素と仮定した項目について、自己肯定感（4 項目）、学習への不安払拭（2 項目）、先生への信頼感（6 項目）、学級への信頼感（3 項目）、被侵害の低さ（6 項目）、被受容感（5 項目）の 26 項目を採用した。これらに加えて「居心地のよさ」を実感することで相互に寛容な姿勢が育つと仮定し、「他者寛容性」を測る 3 項目を加え、以上の 29 項目で本調査を行った。これら各下位尺度に対する回答は 4 件法（とてもそう思う、少しそう思う、あまりそう思わない、まったく思わない）で行った。

（2）「学級の居心地のよさ」測定尺度の因子構造

調査結果に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を施し（Table 1）、5 つの解釈可能な因子が抽出された。各因子は「いじめ被害」「基本的自己信頼感」「担任信頼感」「相互理解」「自信・達成感」と命名された。以上の結果より、仮説の中で「居心地のよい学級」を構成する要素として考えた 6 項目がすべて含まれているので、この質問紙調査から児童の意識を推測することは可能であると判断した。

Table 1　「居心地のよい学級」測定尺度の因子構造

	因子				
	いじめ被害	基本的自己信頼感	担任信頼感	相互理解	自信・達成感
２４あなたはクラスの人に馬鹿にされるなどして、クラスにいたくないと思うことがありますか。	.771	-.108	-.142	-.149	-.101
２２あなたはクラスの人に嫌なことを言われたり、からかわれたりして、つらい思いをすることがありますか。	.721	-.102	-.140	-.142	-.064
２３あなたはクラスの人に暴力をふるわれるなどして、つらい思いをすることがありますか。	.708	-.177	-.034	-.019	.016
２７あなたはクラスの人たちから、ムシされているようなことがありますか。	.612	-.187	-.056	-.161	-.352
１あなたは運動や勉強、係活動や委員会活動、しゅみなどでクラスの人から認められる（すごいなと思われる）ことがあります	.008	.608	.156	-.019	.359
２１あなたは、「生まれてきてよかったな」と思いますか。	-.437	.566	.184	.139	.067
２あなたが失敗したときに、クラスの人がはげましてくれることがありますか。	-.182	.531	-.007	.440	.137
６あなたが自分の思ったことや考えたことを発表したとき、クラスの人たちはひやかしたりしないで、しっかり聞いてくれると思	-.337	.530	.116	.291	.145
４あなたが何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり、応援してくれたりすると思いますか。	-.202	.473	.245	.290	.276
５あなたのクラスには、いろいろな活動に取り組もうとする人がたくさんいると思いますか。	-.240	.473	.076	.157	.013
１３クラスの先生は、あなたの立場や気持ちを理解してくれていると思いますか。	-.102	.308	.771	.187	.118
２８クラスの先生はその時のきげんで態度が変わると、あなたは思いますか。（逆転項目）	.040	-.067	-.679	-.017	-.059
１７クラスの先生は何事も一生けん命だと、あなたは思いますか。	-.223	.122	.478	.263	.159
３０たとえ間違っている時でも、クラスの先生は自分の間違いを認めないと、あなたは思いますか。（逆転項目）	.078	.086	-.460	.089	-.060
１０あなたは、クラスの先生にならいつでも相談ができると思いますか。	-.196	.106	.454	.300	.296
８クラスの中に、あなたの悩みを聞いてくれる人がいると思いますか。	-.108	.295	.087	.634	.308
１５あなたは「自分が苦手だと思う人にも、いいところはある」と思いますか。	-.170	.173	.169	.592	.031
３クラスの中に、あなたの気持ちを分かってくれる人がいると思いますか。	-.087	.271	.358	.573	.438
１２あなたはこのクラスの人が、おたがいのことをよく知っていると思いますか。	-.409	.076	.095	.523	.090
７あなたは、自分には悪い所もあるけど、いいところもあると思いますか。	-.156	.287	-.125	.181	.565
１４あなたは勉強や運動、しゅみなどで、自分に自信を持って取り組んでいることがありますか。	.023	.154	.232	.175	.542
１１あなたは、授業の中で、「わかった」「できた」と思うことがありますか。	-.176	.078	.205	.064	.528

(3)「他者寛容性」と「居心地のよさ」との関連

「他者寛容性」の３項目の合計得点を従属変数として、５因子との間で重回帰分析を行った（Table 2）。その結果、最も大きな影響を与えている因子は「いじめ被害」であり、以下「相互理解」「担任信頼感」「基本的自己信頼感」の順であった。また、「自信・達成感」は「他者寛容性」に影響を与えていないということが示された。以上のことより、いじめのない個の安全が確保できるような学級状況をつくりだすことから指導を進めることが有効であると示唆された。

Table 2　「他者寛容性」と5因子の重回帰分析

		B	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率	下限	上限
4	(定数)	9.726	.129				9.469	9.983
	いじめ被害	-.588	.143	-.361	-4.112	.000	-.873	-.303
	相互理解	.510	.152	.296	3.365	.001	.208	.812
	担任信頼感	.450	.144	.274	3.124	.002	.163	.736
	基本的自己信頼感	.397	.154	.228	2.582	.012	.091	.703

a. 従属変数 他者寛容性

4. 支援対象児Ｂ子さんと所属学級の特徴と様子

(1) WISC-Ⅳの結果より支援対象児の分析

知的水準としては「境界線」に該当し、同年代と比べて幼さが目立つ結果である。また、得手不得手の差が大きく、特に知覚推理、ワーキングメモリ（作業記憶）、処理速度の大きな落ち込みが認められ、不器用さや記憶への配慮が必要ということが特性として読み取れた。

(2) 居心地のよさ測定尺度への個別回答からの分析

質問紙調査実施の直前の心理状態などにより結果は多少前後すると考え、±2 以上の差が出た各因子得点を採用することにした（Table 3）。結果、「担任信頼感」と「自信・達成感」の２因子が大きく落ち込んでいることが示された。

(3) 支援対象児Ｂ子さんの様子（行動観察から）

応用行動分析を用いて“問題行動の起きなかった場面”の前後に何があったのかを観察した結果、友だち関係の良好なときには問題行動が比較的起きていないことから、例えば「抜毛の改善→人間関係の構築」という支援の方向性よりも「人間関係の構築→抜毛の改善」という基本的な方向性が見えてきているように思われた。

Table 3　支援対象児B子さんの因子得点

児童名	いじめ被害	基本的自己信頼感	担任信頼感	相互理解	自信・達成感
B子	0.285	-0.42738	-2.16267	0.38498	-2.02606

(4) 所属学級の様子

男子を中心に非常に幼い思考をする場面が多く、女子は一部グループが悪い雰囲気を作りあげていた。基本的生活習慣が定着せず、一生懸命頑張ることが格好悪いといった雰囲気が蔓延し、互いに関わり合うという姿が見られないのが大きな課題であると考えられた。

5. 第１次支援計画の策定・実践・考察

(1) 第１次支援計画の策定

質問紙調査結果の分析と WISC-Ⅳの結果による客観的資料と観察による結果、並びに担任の指導方針や思いを尊重し、以下のような第１次支援計画を策定した。

■学級集団に対して	■B 子さんに対して
①自己開示を通して自尊感情と他者肯定感を高める。 ②学級の中で正しい行動の基準となる価値観を共有する。 ③基本的生活習慣の定着を図る。	①自尊感情を高める。 ②周囲から注意される機会を減らす。

（2）学級集団に対する具体的な手立てと実践

①担任の行った実践	②筆者が行った実践
・サイコロスピーチによる自己開示の促進。 ・「グッジョブポイント」の設定。 ・基本的生活習慣の定着。	・人間関係プログラム「体を使った協力ゲーム」、グループエンカウンター「よいとこカルタ」の提案。 ・よい行いをした児童に対しその行為のよさも併せて称賛。 ・参観レポートの提出を通しての情報共有化。

（3）支援対象児に対する具体的な手立てと実践

■担任が行った実践	■筆者が行った実践
・B 子さんの努力についてみんなの前で褒める。 ・抜毛対策として座席の横にごみ袋を設置する提案、抜毛行為に関する話し合いの場の設定	・担任が見ていないときの B 子さんの様子を観察・記録し、情報を担任に提供。 ・口頭の指示を付箋にメモして渡す。

（4）実践の結果と考察

第１回、第２回質問紙調査の「他者寛容性」は合計点を、5 因子はそれぞれの平均値について対応のある t 検定を行った結果、「他者寛容性」は、$t=-4.132, df26, p<.001$ で有意な差があることが示された。また、「相互理解」も $t=-3.319, df=26, p<.01$ で有意な差があることが示された。「担任信頼感」についても改善の傾向（$.05<p<.10$）が見られていた。学級としては、5 因子のうち、「相互理解」について改善され、「担任信頼感」に改善の傾向があることが示された。残りの 3 因子については有意な差はなかった。

個別回答を分析していくと「いじめ被害」については 74％の児童が（20/27 人）改善もしくは被害が少ない状態が維持されていると回答していた。「相互理解」についても改善されていることが示された。「他者寛容性」についても 63％の児童が（17/27 人）プラスイメージを持てるようになったと回答していた。さらに「担任信頼感」についても、向上する傾向が見られた。これらの結果によって、「居心地のよさ」を表す指標として設定した「他者寛容性」も数値の上昇が見られ、改善していることを示していると思われる。以上から当初設定したモデルである、「自己と他者関係の良好さ」が「居心地のよい学級」をつくり、「他者寛容性」を向上させるという仮説が実証された。支援対象児の質問紙調査の結果を比較してみると、5 つの因子全てが大きく改善している。それに伴い、「他者寛容性」も改善していることが数値

の上ではっきりと示され、ここまでの支援がB子さんにとって有効であったと思われる。

6. 第2次支援計画の策定・実践・考察

(1) 第2次支援計画の策定

第1次支援計画の実践により、学級集団に対しては一部の児童に前向きな行動が見られ始めた。今後は、それを周囲が認める雰囲気づくりや、広げていくための具体的な手立てが必要であると思われる。支援対象児に対しては、服薬をきっかけにコミュニケーションの取り方が少しずつ落ち着いたものになってきているので、その変化を周囲に伝えていくような具体的な手立てが必要であると思われる。そこで以下のような第2次支援計画を策定した。

■学級集団に対して ①周囲との相互理解を進め、学級集団としての仲間の範囲を広げる。 ②学級の中で正しい行動の基準となる価値観を共有する。 ③基本的生活習慣の定着を図る。	■B子さんに対して ①自尊感情を高めるため周囲との関わりを増やす意図的な場面設定。 ②担任以外との連携した支援の実践。

(2) 学級集団に対する具体的な手立てと実践

①担任の行った実践 ・運動会に向けたチーム作り ・社会科におけるチームによる調べ学習の導入	②筆者が行った実践 ・グループエンカウンター「宝探し」の提案。 ・よい行いをした児童に対し行為のよさも併せて称賛。 ・参観レポートの提出を通しての情報共有化。

(3) 支援対象児に対する具体的な手立てと実践

■担任が行った実践 ・「駿東文園」への作品掲載。 ・支援対象児の周囲への声掛けによる、人間関係構築の意図的な場面設定。	■筆者が行った実践 ・少人数指導「算数」の授業を通して、授業担当者のとの情報交換。 ・口頭の指示を付箋にメモして渡す。

(4) 実践に対する結果と考察

学級集団に対しては、相互理解を進め他者肯定感を向上させていくための働きかけ、体験が成果につながったことで効果があったと思われる。基本的生活習慣についても定着が図られたように観察から読み取れた。しかしながら、児童の自主性を伸ばすことや担任が直接かかわったり見守ったりする時間が、時間的な制約の中で十分に取れなかったことは最高学年の大きな課題であるように思われた。筆者の実践からは、前向きに努力する児童へ声掛けを行うことや、その行動について参観レポートに取り上げることを通して、行動の強化や担任との共通理解を図れたと考えられる。服薬により落ち着いた行動をとることが増えた支援対象児に対して、担任は周囲の児童に手助けをするよう声をかけるなど積極的に介入することでお互いに気持ちのよいコミュニケーションの取り方ができる場面が増えていった。これは

周囲の児童にとってはＢ子さんの変容を知るきっかけにもなり、服薬による落ち着きと支援のタイミングが合ったことでよりよい成果を残したと思われる。筆者の実践からは、少人数教室での授業を通して、担当教諭とＢ子さんの情報を交換しながら指導にあたることで、対応が一貫したものになってきたのではないかと思われる。

７．学級と支援対象児の変化

（1）学級について

第２次支援計画の実践後に第３回質問紙調査を行った。全体を考察するために第１回から第３回質問紙調査の各因子の平均値について対応のあるｔ検定を行った結果、7 月から 10 月にかけて担任信頼感は、$t=2.702, df26, p<0.5$ で有意な差があることが示され、担任信頼感は低下しているということが分かった。また、5 月から 10 月にかけて、どの因子にも有意な差は見られなかった。「他者寛容性」については、改善の傾向（$.05<p<.10$）が見えることが分かった。以上の結果から、各因子の傾向として男女間で傾向が別れ、男子には改善傾向がみられ、女子に対する介入と指導方法の再考する必要性が認められた。

（2）支援対象児について

第 1～3 回質問紙調査より各因子の平均値がプラスイメージとマイナスイメージの間を大きく変化した。特に「基本的自己信頼感」の変化が大きく、周囲からの働きかけや反応により自尊感情が左右されているという不安定な状態であることが考えられ、周囲の児童との人間関係づくりがキーポイントになってくることを示唆している。自尊感情を高めることと周囲との人間関係構築の支援を平行して行っていくことが必要であろう。個人的に信頼関係を築きつつある児童が表れたことで、「他者寛容性」は改善傾向にあり、Ｂ子さんが「居心地のよさ」を感じつつあることがわかる。今後は交流がより深まるような支援と、その児童を窓口にして周囲とのつながりを深めていく支援が必要であると考えられる。

８．研究の成果と今後の展望

居心地のよさ測定尺度を開発することで実態を客観的にとらえることが可能になり、具体的な支援計画を策定するうえでの手がかりとなったことで大きな成果があったと考えられる。質問紙調査による客観的資料から得られた情報と実際に観察の中から得られた情報を組み合わせることで、より実態に近い姿が浮かび上がり、支援の手立てを策定する貴重な手掛かりとなったことから、学級集団に対しても個別支援に対しても成果があったと考えられる。

今後は、多忙化の中でも児童の情報収集を行っていく学級担任としての工夫や、担任の負担を軽減するための組織作りやケース会議の時間設定、効率的な運用も必要となってくる。丁寧な観察と客観的資料を総合的に判断して個人や学級の傾向を把握し、そこに具体的な手を打っていくことで児童の人間関係を成長させ仲間同士で支え合う継続した支援を生み出す基盤となっていくと信じ、学校組織への提案や子どもたちの支援に取り組んでいきたい。